中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1508

一に持戒清浄なり、二に衣食具足す、三に静処に閑居す、四に諸の縁務（雑事）を息める、五に善知識を得る。

（『摩訶止観』）

＜解説＞実践上の重要な点をあげる。正しく戒めを保つ、衣と食を適切にとる、静かなところで住む、生活上の雑務をやめる、そして、よい師や友（善知識）を得ること。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1509

若し勤めて精進すれば、則ち事として難き者なし。是の故に汝等、当に勤めて精進すべし。

（『仏遺教経』）

＜解説＞おまえたち修行者よ（汝等比丘）、精進に勤めればかなわないことはない。であるから努力を忘れてはならない。大いなる目標を忘れずに、怠け心を退け、自らを励ましながら継続する必要がある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1510

縄鋸に木も断たれ、水滴も石を穿つ。道を学ぶ者は須らく力策（努力模索）を加うべし。

（『菜根譚』）

＜解説＞精進を例えによって説明する。つるべの縄も長く井げた（井戸の縁を囲んだ木）をこすっているとノコギリのように木も切られ、水のしずくも長年のあいだに石に穴をあけてしまう。道を学ぶ者はこのように継続が大きな力となる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1511

明眼の賢者は、わずかな資金でも自分の身をたてる。小さな火を吹き起こすように。

（『ジャータカ』）

＜解説＞小さな品物から商売を始めた人が、さまざまな機知、真実を明らかに見る眼により、根気よい努力で豪商になったという話を述べて、引用の言葉が紹介される。釈迦の教えも同じで、一つの教えでも熱心に実践することが大切であると教える。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1513

甘い味のするものは苦いものであり、愛するものとの絆は苦しいものであり、蜜を上下にぬられた刀のようなものであるということに、ひとは気づかない。

（『テーラガーター』）

＜解説＞欲望をコントロールできない状態をたとえによって伝えている。蜜が上下にぬられた刀、なめているうちに自らを傷つけてしまう。そして、その危険性になかなか気づくことができないというのが問題である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.2.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1512

おかねの雨でも欲はみたされない。

（『ジャータカ』）

＜解説＞ある王の話。彼は、この世界で恵まれた生活をしていた。しかしまだ満足できず、さらに楽しいとされる天界におもむいた。とても素晴らしい場所であった。しかし、そこでも欲望を満たすことはできなかった。正しく学ぶ人は、欲の性質を知り、適切に対処し、安楽を得るのだと述べる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1515

夫れ富貴は求むる時甚だ苦しみ、既に得已って守護するに亦苦しみ、後還って之を失えば憂念して復苦しむ。

（『百縁経』）

＜解説＞財産や名誉などを得るときには大変な苦労をする。自分のものになったら、今度はそれを守らなくてはならないし、失ったらまた苦しむ。求めないのがよいわけでなく、苦しまない求め方を会得したい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1514

＜わがもの＞という観念は、わたしの内部に起こって、速やかに熟する。

（『テーラガーター』）

＜解説＞「わがものという観念」、それはありのままの認識や思考ではない。「わがもの」とは、根底に、私の都合で思い通りにできるという気持ちがある。しかし、現実はそのように動いていない。ゆえに、自己と現実のズレ・矛盾が生じる。ズレ・矛盾は苦しみそのものである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1516

人が近づいてはならぬところの、財を散ずる六つの門戸とは何であるか。

（釈迦）

＜解説＞釈迦が説いた生活の知恵である。ここで説明される六つとは、酒類など怠惰の原因に熱中すること、時ならぬのに街を遊び歩くこと、祭礼舞踏など見せものの集会に熱中すること、賭博に熱中すること、悪友ばかりと付き合うこと、そして、怠惰にふけることである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1517

賭博という遊惰の原因に熱中するなら、実に次の六つの過ちが生じる。

（釈迦）

＜解説＞六つとは次の通り。勝てば相手が敵意を持つ、負ければ自らが悲しみ、現実に財産が少なくなってしまい、法廷に入ってもかれのことばは信用されず、友人からは軽蔑され、結婚するとなるとかれには資格がないと反対される。釈迦が説いた生活上の戒めである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1518

世の中では、種々膨大な富を得ても、酔わず、なまけず、愛欲にふけらず、生ける者どもにたいして過ったことをしない人々は少ない。

（『ミリンダ王の問い』）

＜解説＞膨大な富を得た人には陥りやすい傾向がある。豊かな自分に酔い、怠けてなすべきことをなさず、愛欲をほしいままにする。横暴になり、過ちを起こすこともある。それが世間であるが、その中において流されない自分を確立したい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1519

墓場にある幾つかの骸骨を見て、汝はじつに嫌悪する。しかし動く骸骨に満ち充ちている村落という墓場を汝は楽しんでいる。

（『入菩提行論』）

＜解説＞この言葉は、自分を見失って、むさぼりに支配されている者に対して処方された教えともいえよう。確かに、言われればそのとおりである。そのように観(み)ることによって、みずからの貪欲を制御する実践である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1520

わたしは、修行者の仲間を導くであろうとか、あるいは、修行者の仲間は、わたしに頼っているとか思うことがない。

（釈迦）

＜解説＞釈迦が晩年に語った言葉。一つの宗教を作ろうとか、自分が開祖になろうといった意図はなかった。みずから苦しみを克服してブッダ（目覚めた人）と呼ばれるようになった釈迦にとって、修行者たちは同じく苦しみを克服しようとする仲間であった。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1521

悪智慧のあるものは、結局「それによって他人を欺き」、相手にも欺かれるがゆえに、安楽を得ることはできない。

（『ジャータカ』）

＜解説＞ある裁縫師は、使い古しの布を染めて、貝殻でこすり光沢ある新品の衣のように作り、他人が持ってきた新しい布と交換していた。しかし、洗うとボロ布とわかった相手に仕返しされる。欺きはいつの時代もなくならないが、決してそこに安楽はない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1522

人の世は、このように老と死との火によって燃えたっている。人に与えることによって運び出せ。

（釈迦）

＜解説＞人に与え、よく運び出されたものとは、財産や知識や能力なども含めてよいだろう。自ら受容し、人に与える。燃え尽きてしまったなら与える機会なく滅びてしまう。運び出されたものは、その後も残って、他の人のための役に立っていく。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1523

若し不忘念有る者は、諸の煩悩の賊則ち入ること能わず。

（『仏遺教経』）

＜解説＞煩悩の賊が心に入り込むすきを与えないためにはどうすればよいか。ここでは「念を摂めて心に置くべき」（不忘念、正しい教えを実践する自分を忘れることなく保ちつづける）ことが大切であると教えている。それによって欲望の煩悩化を防ごうという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1524

心若し馳散すれば、則ち当に摂し来たりて正念に住すべし。
（『大乗起信論』）

＜解説＞対象に影響され心が散乱しはじめたならば、そのときは、取り収めて、正しい教えを実践する心へと戻さなくてはならない。乱れ散乱する心は対象に支配されるが、正念に安住させることができれば対象から自由であり、支配することができる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1525

一句に参得して透れば、千句万句一時に透る。（『碧巌録』）

＜解説＞一つの言葉のもつ本当の意味を考え続けて、その真意を実践してわかるようになると、他の千句も万句も、にわかにわかってくるものである。道を示す表現は何通りあっても、一つの道を究めて、到達しようとする境地になれば、他の道も同時に理解できることは多い。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1526

いかにもこころのままにてあるべしと申しあうて候うらんこそ、かえすがえす不敏におぼえ候え。（親鸞）

＜解説＞どのようにでも心のままにすればよいのだとお互い言っているのは、つくづく残念なことである。悪人こそ救われるということばを誤解して、反社会的な行動をしてもよい、煩悩のままの行動も許されると勘違いすることは、まったく間違った受け取り方である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.20 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1527

夫れ道に入るは途多けれど、要して之を言えば、二種を出でず。一は理入、二は行入なり。
（『二入四行論』）

＜解説＞真理にいたる方法は多くあるが、要するに二つにつきる。一つは原理による至り方、二つは実践による至り方である。すぐれた理論でも実践なくしては不十分、また、しっかりした理論の裏付けがないなら実践もむなしいものになる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1528

直心是れ道場

（『維摩経』）

＜解説＞「道場というのは何を言うのであるか」に対する答え。純真な心（直心）が道場なのであると述べる。また、心に深く道を求めること、真実を求める心を忘れない、果報を期待しない、耐え忍び精進することなどの実践、それが道場なのだ。つまり、日常生活のすべてを道場、実践修行の場にすることができる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.22 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1529

これらふたりは世間では得がたい。ふたりとは誰らか。先に行う人と、行われたことを知り行われたことを感じる人である。

（釈迦）

＜解説＞最初に道を発見し、その道を進む人は貴重であり、尊敬されるべきだ。その人によって、次の人がすすむ。先人のアドバイスを得ながら、しかも、自分自身が苦労を乗り越えて、道を進む。この追体験ができる人も、なかなか得がたい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.23 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1530

どのような友をつくろうとも、どのような人に付き合おうとも、やがて人はその友のような人になる。人とともに付き合うというのは、そのようなことなのである。

（釈迦）

＜解説＞友の影響力は非常に大きい。たとえば、毒の塗られた矢は、矢筒のなかにある毒の塗られていない矢をも汚してしまう。であるから、思慮ある人は、悪人を友としてはいけない。よき友は何より貴重である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.24 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1531

水を渡る牛の群れの王者が、もしも行くこと直ければ、すべての牛は行くこと直し。

（『ジャータカ』）

＜解説＞指導者・国王の理想を説く。導くもの自身が法にもとづいて生きるべきだと。ここでの法は「人間の普遍的なあるべき姿」である。国王が法によって治めて正しければ、役人たちや民衆も正しくなる。国をあげて安楽に過ごせると述べる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.25 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1532

理想的な帝王は、この大地を征服するであろうが、刑罰によらず、武器によらず、法によって統治する。

（釈迦）

＜解説＞国を治めるものは自らが修養し、欲望の制御が求められる。そして、殺すことなく、殺さしめることなく、勝つことなく、勝たしめることなく、悲しむことなく、悲しませることがない法による政治が理想だという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.26 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1533

恥じることを忘れ、また嫌って、「われは（汝の）友である」と言いながら、しかも為し得る仕事を引き受けない人、――かれを「この人は（わが）友に非ず」と知るべきである。

（釈迦）

＜解説＞このような人は、相手の立場になって考えることができない人。口先や表向きの態度だけで、慈しみをもたない人。決して他を思って実行することをしない。それは友ではないと知るべきだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.27 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1534

怒りたけった人は、善いことでも悪いことでも言い立てるが、のちに怒りがおさまったときには、火に触れたように苦しむ。

（釈迦）

＜解説＞怒りの炎が燃えたぎっているときは、まわりが見えない。汚く傷つけることばを発してしまう。しかし、放たれたことばは消えないし、投げつけられた人がいることを忘れてはならない。怒りがこれまでの努力をすべて壊すこともある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.28 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1535

愚者は、荒々しいことばを語りながら、「自分は勝っているのだ」と考える。しかし謗りを忍ぶ人にこそ、常に勝利があるのだ。

（釈迦）

＜解説＞荒々しいことばを受けることがある。罵られ傷つくこともある。受けた側は適切な対処をしたい。心を制御し、それに忍ぶ。受け取らないのである。そのとき、相手は目的を果たせない。罵りのことばは宙に浮き、発したものに帰っていく。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.2.29 中村元記念館協力